

# 古代国印の復原と課題

## 信濃国印の復原制作を通して

Restoration of Province Seals of Old Times

福島正樹

はじめに

- ① 信濃国印についての概要と資料
- ② 印文復原に際しての調査と検討
- ③ 鈕・印台部・印面の形態
- ④ 制作仕様書の作成と制作
- ⑤ 国印の白布・袴への捺印について

おわりに

### 【論文要旨】

大宝4(704)年に初めて全国一斉に鑄造された国印は、その印影を正倉院文書や正倉院に伝わる麻布などに残すのみで、国印そのものはその後改鑄されたものも含め一点も現存しない。しかし歴史博物館における展示では、残された印影の展示という従来の方法から一歩踏み込んで、現存しない国印を復原して展示するという課題が存した。本稿はこうした資料的制約のもとで試みられた、信濃国印の復原制作の報告である。まず印文について、信濃国印の印影は、正倉院文書には残されておらず、麻布や布袴などに残るのみである。文書に残された印影と異なり、布類に残された印影は布の伸縮などの問題もあり、印面の大きさや印文の字体などの確定には困難な側面もある。複数の印影をトレースしたり、薄れて不明な部分を補ったりする必要もある。そこで、信濃国の場合について布類の印影を検討すると、天平11年に捺されたものと天平宝字8年に捺されたものの印文を異にする二種類があり、大宝4年初鑄の国印は天平宝字年間頃に改鑄されたこと、この頃には大和国印も改鑄されたことがわかった。次に、印字体の大きさや形状をいかに復原するかというより困難な課題があった。形状や大きさでは、印面の大きさは延喜式の規定を念頭に現存する官印とりわけ倉印や郡印を参考にし、印面の彫りの深さや字の太さという点は、彫りの深い法隆寺印を参考にした。なお、鑄造技術の復原的検討という課題については、金属成分比や制作技法についての実験的検討という手法を採ることができず、現在の精密鑄造技術によって実施するなど今後に残された課題も多い。